みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

# 大村しげコレクションのものの周辺



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2009-04-28<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 横川, 公子<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.15021/00001435 |

横川公子・笹原亮二編『モノに見る生活文化とその時代に関する研究』
国立民族学博物館調査報告　68:23-33(2007)

# 2.　大村しげコレクションのものの周辺

横川　公子

## 1　コレクションの内容

国立民族学博物館によって収集された大村しげコレクション（以下コレクションと表記する）は，その居住場所であった京都市中京区の借家に遺されていたものの殆どすべて，信仰や儀礼の道具からいろいろな日用品や空き缶，漬け物用の石，ほとんどゴミと見紛うものまでを含んでいる。ここでは，こうした生活する上で蓄積された総体としての資料の概要について紹介したい。以下，元の所有者，大村しげの家族や人生との関係，その住居の様子，コレクションの調査方法および内容構成などを取り上げている。

## 2　大村しげの住まい

大村しげの住まいの住所は，京都市中京区姉小路通り寺町東入ルである。家の前（南面）は道路を挟んで天正寺の土塀になっており，その土塀の南側は天正寺の墓地である。家の裏（北面）にも本能寺の土塀があり，その土塀の北側は本能寺の墓地である。本能寺は無縁仏の墓を整理して，その空き地に15軒の貸家を建てた。寺町から河原町近くまで道路の北側にだけ家が並んでいる。町中に細く入り込んだ通りで，天正寺の図子ともいわれていた。

大村しげは，晩年の約5年間，バリ島とここととを往復する生活を送り，最晩年には「バリ島が現住所」というように，1年のうち8ヶ月をバリ島で，4ヶ月をここで過ごすという暮らし方になっていた。しかしものは，いつでも生活できるように，旅立ったときのまま遺されており，この場所が，大村しげの終の棲家という機能をもっていたものと考えてよい。住居は，五軒町家とも称される典型的なウナギの寝床式長屋である。その間取り図と主な家具の配置を図1-1～図1-3に示す。大村しげは，この住居の1階を日常生活の場としていた。

## 3　大村家の人々と遺されたもの

大村しげ（本名　大村重子）は，1918（大正7）年11月6日，祇園切通の仕出し屋「魚金」の当主大村金次郎・ウノ夫妻の長女として生まれた。その幼児期に，妹3人と末の弟1人が次々と生まれたが，母親が糖尿病であったためか，相継いで夭折し

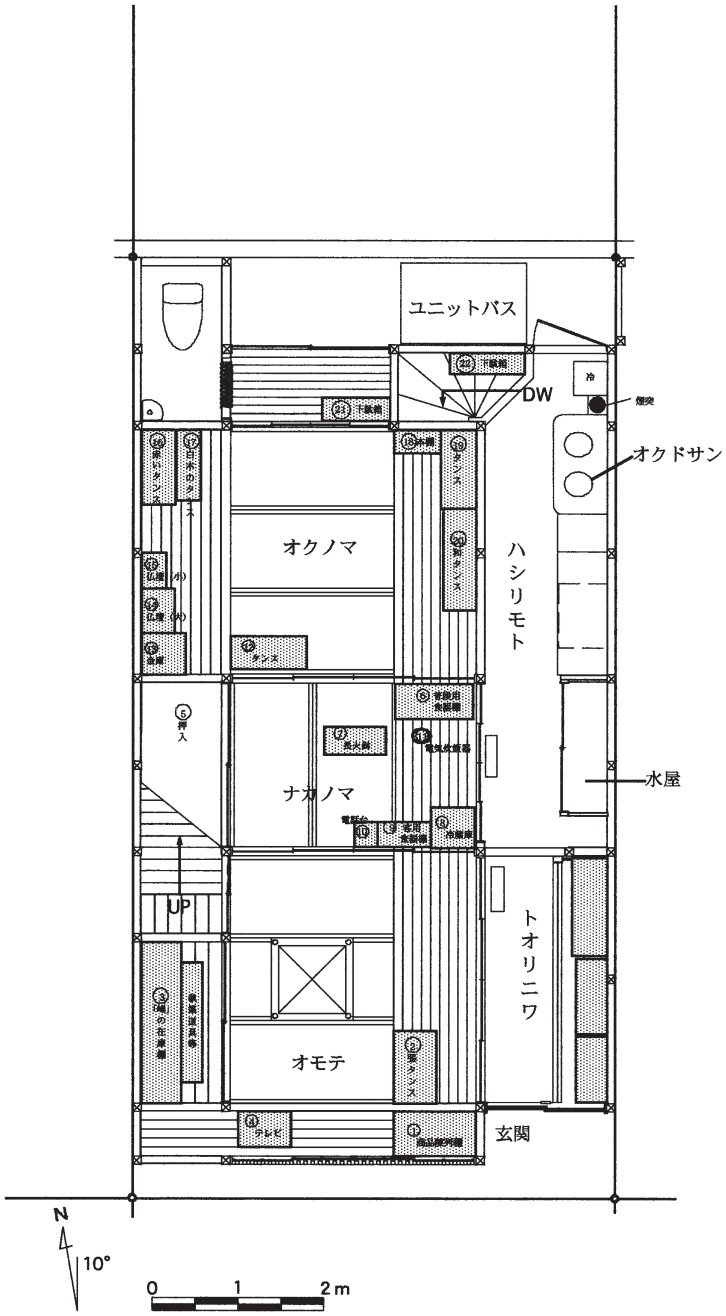


図 1-1　大村しげの住んだ町家（1 階）
佐藤浩司氏の調査図をもとに作成

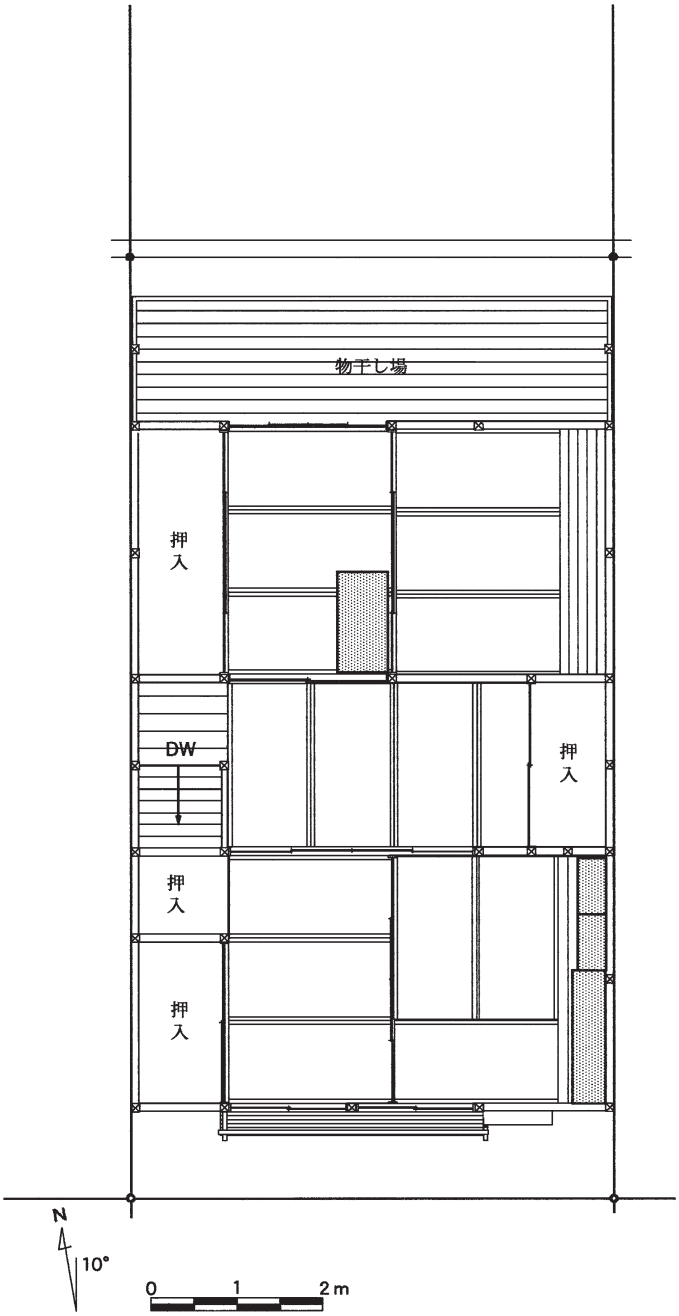


図 1-2　大村しげの住んだ町家（2 階）
佐藤浩司氏の調査図をもとに作成

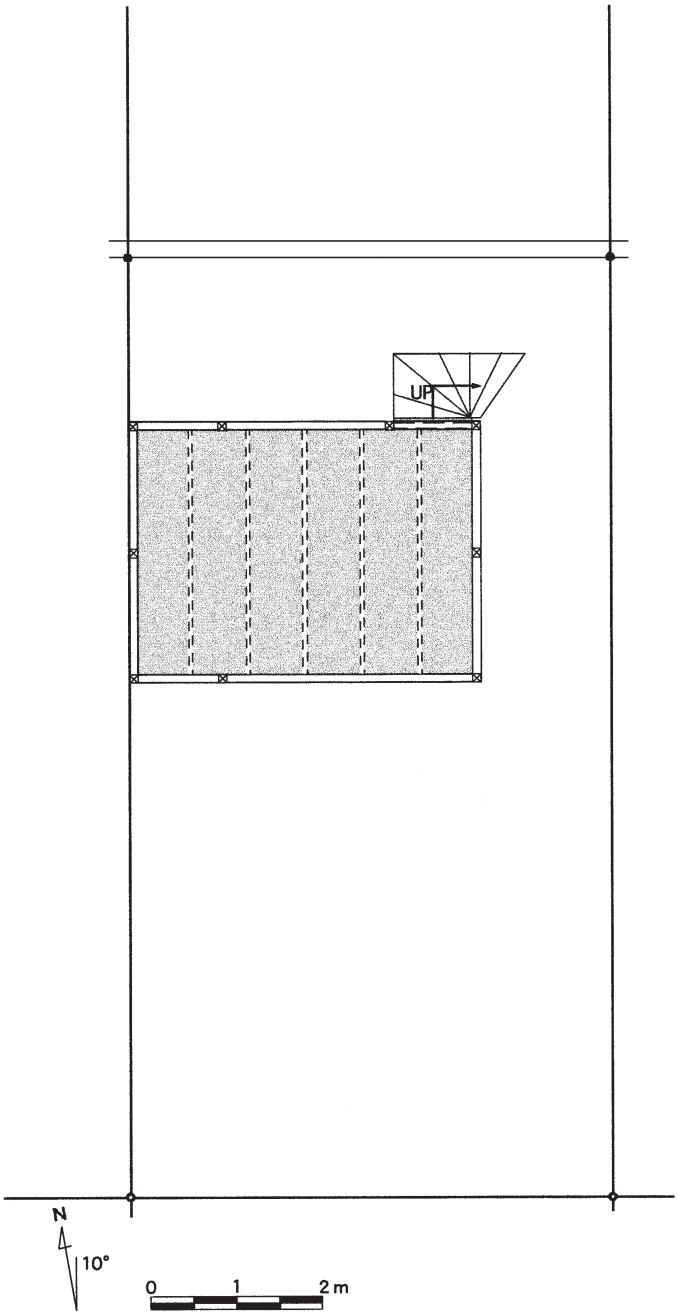


図 1-3　大村しげの住んだ町家（地階）
佐藤浩司氏の調査図をもとに作成

た。弟妹の位牌は，岐阜県の伊自良村（現山県市小倉町）東光寺に，現在は父と母さらには「重子」の位牌とともに納められている。なお，大村家の墓は元々，京都と大阪の中ほどの八幡市の円福寺僧堂にある[1)]。大村しげ自身は健康に育ち，1925（大正14）年，6歳で京都市立弥栄小学校に入学するが，父母の考えで1929（昭和4）年，5年生から中京区の日彰尋常小学校に転校する。この日彰尋常小学校を卒業した1931（昭和6）年，重子，数え年14歳の時に母方の祖母ハルが他界する。日彰尋常小学校の同級生とは，渋柿会という同窓会を通じて生涯にわたって交流があった[2)]。

大村しげが「女専」（京都女子専門学校）に入学した16歳の時（1935・昭和10年），この姉小路の借家で一人暮らしを始め，1999（平成11）年3月に，逗留していたバリ島で死を迎えるまで，ここを本拠として一生を終えたのである。この間，1938（昭和13）年，20歳のときに，両親が祇園から引っ越してきて同居する。その後，1957〜59（昭和32〜34）年に両親が相次いで亡くなるまでの20年余の間，ここで両親とともに暮らした。その間，父親の仕出し屋「魚金」も，規模を縮小し，魚屋を中心とするようになるが，祇園からそのまま引っ越してきて，この場所で営まれた。この借家は，1931（昭和6）年に建築された[3)]もので，当時既に都市ガスと上水道の設備が整っていた。しかし大村家では，両親が引っ越してくると同時に，通り庭の奥に祇園の店から竈（おくどさん）を移設し，玄関前に井戸を掘って，仕出し業・魚屋を本格的に営んでいた。しかし父親の事故死とその2年後の母親の死によって廃業する。父親の死後から，下宿生を置くようになる。やがて1965（昭和40）年6月1日から出入りしていた朝日新聞京都支局の記者の紹介で「西陣青年の家」[4)]に非常勤嘱託として勤務しはじめた。さらに「手作りの店　峯」（以下では「峯」と表記する）の店番などをしながら，主として投稿原稿の執筆を続け，やがて物書きとして自立する。最晩年に脳梗塞のために体が不自由になってからは，1年のうち8ヶ月をバリ島に暮らすようになり，バリ島ウブドにも暮らしの拠点を持つ。が，京都の姉小路の家への帰りを目前にしながら，バリ島で倒れ，かの地で死を迎えるに至った。

従って姉小路の住まいには，以上のような生涯を送った大村しげとその家族の暮らしを支えたものが蓄積されたということができる。とりわけ大村しげは，ちびた下駄も後の世の学者さんのために資料になるのだから（大村 1999: 295）として捨てずに残したから，ものは捨てられることなく蓄積されたのである。以下，ものの概容と関連させながら，改めて年譜を整理しておきたい。ここでいうものは，家族の暮らしを支えたものであり，大きく分けると，1938（昭和13）年に祇園切通しから父母が持参し，その後の仕出し屋の営みの中で使われたものを含む家族生活の時代のものと，父母の死後，従来からのものの蓄積の上に大村しげの暮らしの中で使用され集積されたものを含むと考えられる。

大村しげの生涯は，年譜から見ると，暮らしの変化を節目として，ほぼ5つの時期

に分けることができる。その区分に従って，各時期の暮らしの特徴的なものを見てみると以下のようなものたちをあげることができる。なお女専時代の一人暮らしを支えたものを特定することはできず，父母との暮らしの延長上にあるものと見做した。

まず，大村しげが祇園の仕出屋で暮らしていた頃から姉小路に移って一人暮らしをしていた期間で，生まれてから20歳頃までにあたる。この時期のものには，一家の暮らしを構成するものが，量的にもまとまって含まれている。明治生まれの父母のものは勿論であるが，祇園の仕出屋で同居していたらしい母方の祖母[5]のものが含まれる。実際に一分銀が発見されているし[6]，大村しげの著作にも「おばあさんの赤いちゃんちゃんこ」の記憶が登場している（大村 1999: 298）。大村しげの子供時代のものとして，幼時の種痘の記録や解いた着物の端切れ，おもちゃ，小学校時代から女学校時代の教材類などがほぼ揃って残されている。祇園で仕出し屋を営んでいた頃からの父親の仕出し業に使われた漆器や陶磁器や専門家用の調理道具も，借家への引っ越し以前からの大村家の所持品と思われる。

次に，両親がこの借家に転居してから相継いでなくなるまでの約20年間を，一区切りとすることができる。大村家の姉小路の借家における家族生活の時代で，大村しげが女専を中退した頃の20歳頃から40歳はじめ頃までにあたる。この時期には，父母の暮らしをささえた一群のものが加えられた。大村しげの幼時に，妹3人と末弟1人が相次いで亡くなっており，その供養のために，僧による月参りが恒例となっていたという。父親，金次郎氏は熱心な禅宗信者で，禅僧たちとの親密な交流があったことが知られる。実際に，1949（昭和24）年10月6日付の，「伊自良郷，東光禅寺，東英和尚」から金次郎氏に当てた寺納證ほか，多くの書簡が発見されている。これらの交流による，大量の色紙や掛け軸[7]が，遺品として遺された。

さらに，この時期に使われたものとして特筆できるものに，日本髪を結うための「髢（かもじ）」がある。髢は，新聞に包まれ紙箱にまとめられていた。この新聞に1937（昭和12）年，1938（同13）年，1939（同14）年，および1957（同32）年の日付が確かめられる。また，この髢を使って，豊かな黒髪を結い上げた娘時代の大村しげの写真があり，両親と同居し始めた頃の姿を偲ぶことができる。未使用の「　40号」の商品タグがついた雨下駄や非常用保存食が詰められた陶器製の防衛食特許真空容器など，戦時下の統制品も見られる。また，ウエストを絞ったディオール風のブラウスとスカートなどの洋装一式があり，これは本格的な洋装である。戦後の洋裁ブームの時代を過ごした若い頃の大村重子を想起させるものである。なお前述の髢を包んであった1957（昭和32）年10月の新聞は，父，金次郎氏を亡くしてほぼ半年後にあたる。また多くのハギレが整理して遺されており，これは母親が管理していたものだろう。朝日新聞への多くの投稿文の切抜きや朝日ペンシル会で賞を得た懸賞作文や，朝日ペンシル会の会誌『私の作文』への投稿作文が遺された。また『私の作文』の編集・

発行にかかわっており，それらのガリ版刷りの冊子一揃いが遺される等，初期の執筆活動の成果が確かめられる。

さらに1957（昭和32）年5月1日の父親の死後に下宿生を置き始めて以降の，40歳前後から50歳頃までを，一区切りとすることができる。この時期には，大村しげは，「西陣青年の家」に非常勤で嘱託勤務する傍ら，物書きとして自立していった時代である。1963〜4（昭和38〜39）年には，筆名「大村しげ」として「おばんざい」を秋山十三子・平山千鶴とともに，朝日新聞京都版に連載し，さらに多彩なメディアに，生地京都の食べ物と暮らしを次々と描き出していった。また，「西陣青年の家」の読書サークルのメンバーを中心とする青年たちが，以後亡くなるまで，30年来の大村しげの「親衛隊」となる。親衛隊の一人，鈴木靖峯氏とは，後に共同で「峯」を営み，晩年のバリ島暮らしへとつながっていくことになる。そして鈴木氏は，バリ島で大村しげの最期を看取った。47歳の時，クーラーがついたので西陣青年の家の勤務を辞め（大村 1996: 208），このときには下宿もすでに廃業している。なお親衛隊は，大村しげの生涯にわたって，仲間として支援しつづけ，その死後も，持ちつ持たれつの関係が保たれている。大村しげの存在は，このひとびとの仕事や交際の上に現在も名残を留めている[8)]。

1969（昭和44）年，大村しげ51歳から，70歳過ぎまでの20年余の期間が次の一区切りである。この間，オモテの間で「峯」を鈴木氏とともに営む。この時期には，昼の間は「峯」の店番をしながら，夜半から明け方に掛けて執筆するという生活スタイルが出来上がった。オモテの間は書斎兼応接間でもあったから，大村しげの執筆に関する多くのものがここに遺された。それらには，著作物のほか，料理屋のメニュー，訪れた観光地や旅館のパンフレット，寺院拝観の半券など，多くの取材資料が含まれる。さらにこの時期には，著述に登場する生活用具や京都の手作り品，物書きとしての交際を示す書簡類や出版記念会の記録，贈答品などが遺されている。また，料理書やテレビ番組の取材用の食器として，若い陶芸家の作品が集められ，その一部が遺されている[9)]。脳梗塞で倒れるまでの20年あまりは，執筆と講演，マスコミでの活躍などが軌道に乗り，大村しげの物書き生活の黄金時代といえよう。この間，1982（昭和57）年にはじめてバリ島に行き，以後毎年出かけるようになる。この時期に集積されたと思われる，以上のようなものは，家族生活から切り離された「物書き」大村しげの暮らしを支えたものといえよう。

1994（平成6）年，大村しげ76歳の時に，バリ島逗留中に脳梗塞に倒れ，リハビリ生活が始まる。その翌年の1995（平成7）年（77歳），喜寿の祝いを兼ね，バリ島に取材した本の出版記念会が開催された。大村しげは，この年をバリ島元年とする。それからバリ島で亡くなるまでが，最晩年の期間である。この最晩年の時期は，車椅子を使い，生活のスタイルはリハビリ生活に切り替えられていた。それに伴って，姉

小路の住まいには至る所に把手をつけ，車椅子が通れるようにし，トイレやポータブル・バスルームを改良するなど，リフォームが施された。また3冊の著作[10]を書き上げたバリ島が，後には「現住所」とされるようになり，バリ島に暮らしの本拠を置くようになる。但しバリ島での暮らしは，メードや運転手，料理人などに支援された生活であり，所持品も現地で調達したわずかな衣類くらいで，簡素な暮らし方であった[11]。従ってこの時期に遺されたものは，リハビリ生活に対応して切り替えられる。たとえば，こよなく愛した和装類は，この時期から殆ど着なくなり，生前形見として友人・知人に分け与えられた。一方で，着脱の便利な改良服や洋装下着が所持品に含まれるようになる。関係者からの聞き取りによれば，これらを収納するタンスも加えられた。なお，バリ島での暮らし振りに関しては，現地調査が行われており，別に報告する予定である。

以上のようにコレクションには，大村しげが生まれる前の父母の暮らしに関わるものから，大村しげ自身の幼児から高齢期にいたる20世紀のほぼ全体を通して蓄積されてきたものが含まれる。父母が使い，保持し，大村しげがそれらをそのまま受け継いだもののほか，彼女自身の暮らしによって所持されるようになり，保持されてきたと思われるものが含まれるのである。

以上は，ものが蓄積された時期的な区分によって概観したものであるが，コレクションと年譜との関係については，さらに詳細な検討が要請される。

なお，ものは，単純に蓄積されたとはいえず，暮らしの展開に伴って出入りがあった。しかし，集積されたものはほぼ遺され，ここでの暮らしの証となるものと考えることができる。

大村しげの居住空間に注目した年譜については，資料として文末に収録しているので参照されたい。

## 注

1) 大村家の墓は，京都の南端，八幡市の円福寺にある。自分が亡くなれば，いずれ無縁の墓になるのでそこに入りたくないというしげが，子供のころからなついていた小倉東英和尚のいる東光寺で父母と共に成仏したい（大村 1999: 34）という意志にしたがって，位牌は現在，東光寺にある。
2) コレクションには日彰尋常小学校の同窓会「渋柿会」の名簿や親睦会の記念写真が残されている。
3) 大村しげが終の棲家とした五軒町家は，生活財を引き払った後，家主である本能寺の倉庫として使われている。本能寺の好意によって内外を調査し，近隣の住民からも住まいや大村しげの暮らしぶりについて聞くことが出来た。
4) 西陣青年の家は，京都西陣にある勤労青少年ホームの通称であり，1965（昭和40）年6月からしげは，週2回，木・土の午後5時から勤めはじめた。「祇園で生まれ，町の小学校へ

通うて，いちばん京都らしいところを見て育った。けれど，もう一つ，西陣が欠けていたので，なんとしてでも西陣というところを知りたかった」と書き残している（大村 1985: 104）。

5）祖母は，1853（嘉永 6）年生まれで，重子が小学校を卒業した 1930（昭和 5）年に死亡した。

6）一分銀 1 粒は，仏壇の抽斗に入っていたが，これは明治以前のものだろう。

7）コレクションには京都市南郊の八幡円福寺の泥龍宗潤住職，京都市北区西賀茂の吉祥山・正伝寺の山崎秀山住職，岐阜県伊自良の東光寺住職・小倉東英師らの書画が遺されている。僧たちは，1935（昭和 10）年頃から父親の死後まで，月参りなどで親しく大村家に出入りしていたことが聞き取り調査によって知られている。

8）親衛隊のメンバーへのインタビューによれば，彼等の現在の職業や継続されている交際の上に，大村しげの存在が色濃く遺されている。最期を見取った鈴木靖峯氏は，七宝焼作家や紙漉による工芸家の才能を大村しげに認められ，その後の人生を左右されることになった。また蕎麦料理の澤田正三氏は，30 代から料理人として立つまで，殆ど毎晩のように料理の味を鑑定してもらって今に至った。この蕎麦料理「澤正」の毎月のメニューに，晩年の大村しげがバリ島から寄稿しており，今ではその原稿が当店の宝物になっているという。また杉村和重氏や高橋健二氏は，「西陣青年の家」時代から，それぞれ西陣の機屋や紋屋として活躍される。かれらは大村しげの出版記念会を回り持ちで主催し，応援した。また中京に出向いた夜分には，必ず大村しげさんの処に立ち寄り，ご馳走になって世間話に花を咲かせた。また同道して，おいしいものを食べさせてもらったという。彼らの世間話は，大村しげの文章になったものが少なくないという。「親衛隊」とはいうものの，彼らと大村しげは，持ちつ持たれつの関係で，共に齢を重ねた仲間だという。

9）若手の芸術家の作品は，「峯」で販売するものも含まれる。親衛隊のメンバーによれば，大村しげは若いアーティストを支援するために，彼らの作品を積極的に購入した。なお，その収集品の多くは，死後の形見分けとして親しい人々に受け継がれている。

10）1996　『ハートランドバリ島村ぐらし』京都：淡交社。
　　1996　『車椅子の目線で　京都・バリ島，暮らしの旅』東京：佼成出版社。
　　1997　『アユとビビ　京おんなのバリ島』東京：新潮社。

11）鈴木靖峯氏よりのインタビューと，バリ島ウブドのビンタンビレッヂにおける調査から，大村しげの簡素なバリ島暮らしであることをつきとめている。

## 文　献

大村しげ
　1985　『静かな京　わたしの京都案内』東京：講談社。
　1996　『車椅子の目線で　京都・バリ，暮らしの旅』東京：佼成出版社。
　1999　『京都・バリ島車椅子往来』東京：中央公論社。

表　大村しげの年譜と居住空間

| 西暦 | 大村しげの年齢 | 大村しげ年譜など<br>大村金次郎：大村家は日蓮宗だったが自分から妙心寺系宗旨変更，父方の親戚とは疎遠。<br>母ウノ：寺町二条の広瀬家より大正５年結婚（広瀬家は大阪堺の広瀬商店から）<br>母方祖母ハル：嘉永７（６？）年生まれ | 寺町姉小路の借家 | | | | | | | | | | バリ島 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 仕出屋「魚金」 | 父（明治21年生） | 母（明治24年生） | 本　人 | 同居人（下宿生） | 同居人（下宿生） | 同居人（下宿生） | 同居人（下宿生） | 同居人（下宿生） | 同居人（鈴木氏） | 鈴木氏 | 同居人（しげ） |
| 1918 | 0 | 大正７年11月６日（縄手通り大和大路通り常盤町の生家）祇園切通しの仕出屋「魚金」の長女として生まれる。 | | | | | | | | | | | | |
| 1919 | 1 | ６月妹光子夭逝。 | | | | | | | | | | | | |
| 1920 | 2 | | | | | | | | | | | | | |
| 1921 | 3 | | | | | | | | | | | | | |
| 1922 | 4 | | | | | | | | | | | | | |
| 1923 | 5 | | | | | | | | | | | | | |
| 1924 | 6 | 京都市弥栄尋常小学校入学。 | | | | | | | | | | | | |
| 1925 | 7 | | | | | | | | | | | | | |
| 1926 | 8 | | | | | | | | | | | | | |
| 1927 | 9 | | | | | | | | | | | | | |
| 1928 | 10 | ８月妹夭逝。 | | | | | | | | | | | | |
| 1929 | 11 | 日彰尋常小学校（現高倉小，蛸薬師高倉通り）５年生へ転校。 | | | | | | | | | | | | |
| 1930 | 12 | | | | | | | | | | | | | |
| 1931 | 13 | ４月，京都高等女学校・京都裁縫女学校入学。母方の祖母ハル死去。<br>12月妹夭逝。 | | | | | | | | | | | | |
| 1932 | 14 | | | | | | | | | | | | | |
| 1933 | 15 | ６月末弟夭逝。 | | | | | | | | | | | | |
| 1934 | 16 | | | | | | | | | | | | | |
| 1935 | 17 | ４月京都女子高等専門学校国文科（現京都女子大学）入学。姉小路寺町東入ルの本能寺の借家に一人暮らしを始める。 | | | | | | | | | | | | |
| 1936 | 18 | | | | | | | | | | | | | |
| 1937 | 19 | | | | | | | | | | | | | |
| 1938 | 20 | 両親が姉小路の借家に引越してくる。 | | | | | | | | | | | | |
| 1939 | 21 | | | | | | | | | | | | | |
| 1940 | 22 | | | | | | | | | | | | | |
| 1941 | 23 | 12月８日から新聞を残し始める。 | | | | | | | | | | | | |
| 1942 | 24 | | | | | | | | | | | | | |
| 1943 | 25 | | | | | | | | | | | | | |
| 1944 | 26 | | | | | | | | | | | | | |
| 1945 | 27 | 朝日「婦人ペンシル会」創設。 | | | | | | | | | | | | |
| 1946 | 28 | | | | | | | | | | | | | |
| 1947 | 29 | 「ひととき」会たちあげ。 | | | | | | | | | | | | |
| 1948 | 30 | | | | | | | | | | | | | |
| 1949 | 31 | 朝日「ひととき」「声」に投稿。 | | | | | | | | | | | | |
| 1950 | 32 | | | | | | | | | | | | | |
| 1951 | 33 | | | | | | | | | | | | | |
| 1952 | 34 | 大村重子「財産」『婦人朝日』６月号懸賞作文に入選。 | | | | | | | | | | | | |
| 1953 | 35 | | | | | | | | | | | | | |
| 1954 | 36 | | | | | | | | | | | | | |
| 1955 | 37 | 機関紙『ひととき』第１号発刊，大村重子編集。 | | | | | | | | | | | | |
| 1956 | 38 | | | | | | | | | | | | | |
| 1957 | 39 | ５月１日，父親が交通事故死（68歳），店をやめる。９月から下宿生をおく。<br>保険金で岐阜東光寺に弁天堂を建立することにする。 | | | | | | | | | | | | |
| 1958 | 40 | | | | | | | | | | | | | |
| 1959 | 41 | 東光寺に桧皮葺の弁天堂完成　父親の喉仏を納骨　１月に母親死去（69歳）。 | | | | | | | | | | | | |
| 1960 | 42 | 東光寺弁天堂に母親の喉仏を納骨する。 | | | | | | | | | | | | |
| 1961 | 43 | | | | | | | | | | | | | |
| 1962 | 44 | | | | | | | | | | | | | |
| 1963 | 45 | 朝日新聞京都版の額下に，週２回１月より秋山十三子，平山千鶴と３人で「おばんざい」の連載開始。 | | | | | | | | | | | | |
| 1964 | 46 | ３月同上「おばんざい」連載完了。 | | | | | | | | | | | | |
| 1965 | 47 | ６月１日付「西陣勤労青少年ホーム運営業務」の委嘱（京都市長高山義三）報酬月額４万円。 | | | | | | | | | | | | |
| 1966 | 48 | 初めての出版：『おばんざい京の味ごよみ』（中外書房） | | | | | | | | | | | | |
| 1967 | 49 | | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | 50 | | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | 51 | 手作りの店「峯」をはじめる。鈴木氏同居。 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | 52 | | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | 53 | | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | 54 | 文化観光局非常勤嘱託勤務更新「人事異動通知書」（４月１日京都市長舟橋求己） | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | 55 | 京都市文化観光局　非常勤嘱託を辞退。「人事異動通知書」（３月31日京都市長船橋求巳）クーラーがつくので，青年の家をやめる。 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | 56 | | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | 57 | | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | 58 | | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | 59 | | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | 60 | （鈴木氏始めてバリ島へ） | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | 61 | | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | 62 | | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | 63 | | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | 64 | ６月，鈴木氏の matahari コテージ落成式参加で始めてバリ島へ。<br>この後，毎年バリ島に旅行するようになる。 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | 65 | | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | 66 | | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | 67 | | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | 68 | | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | 69 | | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | 70 | | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | 71 | 昭和末年を機に新聞の蓄積をやめる。 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | 72 | | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | 73 | | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | 74 | 階段から落ちて腰を痛め，車椅子にはじめてのせてもらう。 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | 75 | | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | 76 | ６月，13回目のバリ島旅行中に脳梗塞で倒れる。デンパサールの国立病院に３週間入院。帰国後，京都の第一赤十字病院に３ヶ月入院。他のリハビリ病院で３ヶ月入院。 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | 77 | １月よりウブド，ビンタン・バリ・コテッジで療養生活開始。<br>２月よりアユさんがメイドとしてくる。３月末バリ島より直行して京都市左京区の安井病院へ３週間入院。４月下旬11ヶ月ぶりに自宅に帰る。友人・知人から喜寿の祝いをしてもらう。春（4，5月），秋（10，11月）の計４ヶ月を京都で過ごし，あと４ヶ月ずつバリ島暮らし。バリ島元年。 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | 78 | ６月遺言状を書き，葬式のやり方を指示。 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | 79 | １月再び脳梗塞。５月　東京・中野，呉服・山田屋でバリ島の布200点余の展示会。<br>秋，京都全日空ホテルで「バリ島の本」３冊の最後の出版記念会。 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | 80 | 80歳の誕生パーティをバリ島でしてもらう。初めて入れ歯を作る。日本に帰らず。 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | 81 | ３月18日，バリ島で死去，火葬，３月25日遺骨で帰国。家財道具の寄贈。<br>アユの結婚。（鈴木氏の甥）と日本へ。<br>４月17日岐阜県伊自良村東光寺弁天堂に納骨。 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | 一周忌に散骨式をバリで。両親，弟妹の位牌も東光寺の弁天堂へ。<br>（４月家財道具が民博へ寄贈，２トントラックで５台分。整理作業開始，アユに第１子重美誕生）。 | | | | | | | | | | | | |

年譜凡例：

■ 寺町姉小路の借家住まいの期間をあらわす。　■ 同所で「魚金」を営業した期間。　■ 同所に下宿させた期間。　■ バリ島ウブドに暮した期間。